

さんが 三河紀行素描

—戦時下の旧北満辺境調査旅行日誌—

石井(藤井) 素介*

前文

以下の旅行記録は、太平洋戦争の末期にあたる1944年から1945年の初めにかけての約二ヶ月半、東京大学地理学専攻の学生として旧満洲国に派遣された当時の調査旅行の日誌とその前後の断片的な記録をまとめたものである。調査とは称しながら、何分筆者自身、1943年10月理学部地理学科に入学以降の一年間、地理学・地質学・人類学・植物生態学等の講義や演習を受けただけの、調査担当者としては全くの駆け出し状態の学生であったので、本格的な調査成果を得る自信などまったくなかったのは言うまでもない。とは言っても、今から考えてみると、筆者自身にとって、これは青年時代のまたない貴重な体験であったし、特に、それまでとかく内に籠もりがちであった自分の視野を、広く外部世界に拡大する決定的な機会となったという点で、筆者の人生における重要な画期であったと言えるだろう。偶然の事情によるとは言え、学生の身分で国外の調査に派遣されるのは望外の幸運であったし、とりわけ旧満洲国の中でも興安嶺を越えた西北辺境のソ満国境地帯は、民間人としての自由な旅行などは論外で、旅行許可を得ること自体、容易なことではなかった。そんな状況の下で、ともかくも辺境地帯に位置する白系ロシア人入植村の現地調査に行けることになったので、何はともあれ自分なりに全力でこれに取り組むことになったわけである。

その当時、この旅行計画を取り巻く四囲の情勢について、自分自身一体どのように考えていたのか、今から振り返って、これを客観的に判断し直してみようと

いうのは、実際のところかなり困難な作業である。強いて言えば、混迷の状況を呈していた戦争の推移や世界の情勢については、情報の一般的な制約の下で時代の潮流に押し流されながらも、何とはなしに、おぼろげな不安感と希望的推測による楽観とが交錯する、主観的判断しか持っていなかったに違いないが、この点についても、後知恵による自己弁護への誘惑を排除するなら、現時点では推測以上のことは容易には判定できない。ただ、国内の日常生活から離れて言葉の通じ難い異民族の住む地域におもむき、その生活に直接触れてみるという経験が、自分を含めて自分の国を取り巻く情勢を改めて見直すための、またとない契機を与えてくれることになったわけで、それまで自分自身、ほとんど無意識のまま時流に流されていた状態から、社会に、そして世界に眼を開くきっかけを掴むことができたことは確かである。

事実上、当時の大日本帝国が支配する植民地の状態にあった朝鮮半島と旧満洲国を、日本人のひとりとして旅行し調査をしようとする場合、何らかの程度、自国官権すじにつながる現地の権力機構に依存せざるを得なかったのは、いまさら言うまでもない。そのことは充分承知の上であったとしても、短時日の旅行と観察を通じて、どこまで現地社会の実像に接近し得たのかという点になると、いささか心許ないと言わざるを得ない。しかし、現地でも様々の局面でお世話になった人々はまことに人間的で、遠来の一学生に対しても家族同様に待遇してくれた。特に西北辺境地帯で三週間余り滞在した白系ロシア人の村々においても、客人の扱いは概して開放的であり、調査に当って懐疑や警戒のそぶりを感ずることもなく全く協力的であった。今でも時々現地での様々な場面での人々の印象を断片的

* 明治大学名誉教授

に思い出すことがある。ただ、ひとつだけ心残りなのは、これら現地で出会った人々が、それからわずか半年あまりの後、思いもかけず国境を越えて攻め込んできたソ連軍の襲来に遭遇することになって、それ以後はたしてどんな運命を辿ることになったのか、その後、ほとんど何の情報も得られないまま半世紀以上の歳月が過ぎ去ってしまったことである。(実は、この文章の執筆の途上で、思いもかけず、かつて戦時下の現地でお世話になった数人の日本人の方々と、実に五十数年ぶりに手紙や電話を通じて連絡がつき、一部の方には直接お目にかかり参考資料まで提供して頂いた。これについては、改めて別に取上げることにする。)

この旅行記録の一部は、元来終戦直後の1946年初頭のころから少しずつ書きためていたものである。本来はこの調査結果を中軸にして学部卒業論文をまとめるつもりであったのだが、現地滞在の最後に当時の新京郵便局から東京の大学宛に送った書籍小包みの大部分が、敗戦時の混乱で行方不明になってしまったこともあって、その計画は中止を余儀なくされ、卒業論文は他のテーマを選ばざるを得ないことになった。しかし、旅行記の方だけは、記憶の失われないうちに出来るだけ記録に残しておこうとしたわけである。しかし、それも日々の行動の概略を記した日誌、現地で筆記した地図や調査資料等の一部、それにハイラルの街や三河地方に入ってから歩いた村々での観察事項や印象について書きつづった文章の断片などが、未完成のまま紙袋に入れて保管されていた程度のものに過ぎなかったのである。

何れそのうち何かの形でまとめることにしようと、袋詰めにしたのが運の尽きで、それからまたたくうちに実に五十数年が経過してしまったのである。旅行中の様々の場面については、まざまざと思い出すことはあっても、大部分が記憶の彼方に霞んでしまったも同然のこの調査旅行について、いまさら・・・という気がしないではないが、せつかく袋詰めの記録ひとかたまりが出てきたのを機会に、何とか記録の欠落部分を補って、ひとつの旅行記として復元する作業に取り掛かってみることにしたわけである。それは、自分自身にとつての思い出というばかりでなく、第二次大戦末の混乱期という、現在から見ればもはや歴史の一齣ともいふべき、たぐい稀な時点での、しかも日本の疑似

植民地の辺境という、現在でも容易には再訪困難な地域への旅を記録に残しておく、という点において一定の意味があるだろうと考えたからである。

そこで、まず第一段階の作業として、旅行の準備段階を含めて日誌風の行動記録を記述することから始めることにした。なお、当時は旧制高等学校の修学年限が、前々年の1942年度にそれまでの三カ年から半年繰り上げて二年半となっていて、筆者らの学年は1943年7月に高校卒業、大学への入学は同年10月で、大学修学は三カ年、学部卒業は1946年9月末という変則の時期に当たっていた。戦時下ではあったが学部の最初の一年間だけは正常の授業が実施されていた。

学年末の1944年7月には学部の一・二年生(前期・中期生と呼んでいた)の参加する恒例の野外巡検が実施された。実習指導は当時地理学教室の助手であった木内信蔵・吉崎恵次両氏が当り、大学院生や三年生の一部も参加していたように記憶する。

ただ、実習参加以前に、一回だけ農村調査らしきものの洗礼に浴したことがある。1944年3月に、地理学専攻で2年上級であった入江敏夫氏のお伴で信州富士見の調査に行ったのがそれである。これは、およそ調査というものの初体験であっただけに、忘れられない思い出でもあるので、その記録から始めることにする。

調査旅行以前の訓練・準備

農村調査見習い(1944年春 東京大学理学部地理学科 前期=1年在学中)

月/日(曜日)

3/8(水) 上級生の入江敏夫氏に従って拓殖協会に池田氏を訪問(調査打合せ)

3/9(木) 入江氏と新宿より中央線で富士見へ。「油屋」泊、池田氏も来る。

3/10(金) 宿出発—丸通—富士見—芋ノ木—横吹—木ノ間—若宮—役場—農家の某氏宅で聴取り調査(ここで山盛りの馬鈴薯がでる)—青柳駅より夜行列車で新宿へ。

[この調査は、信州富士見地区の地場産業であった寒

天製造業の実態、特に北信地域から季節出稼ぎに來ている熟練職人たちについての予備的な調査だったように記憶しているが、馬鈴薯の山盛りという鮮明な印象以外の記憶はあまり定かでない。しかし、大学の教室から野外に出かけて行って、農村という現場を自分の眼で直接に観察し、現地に住む人々と対話を交わすという、いわゆる現地調査のやり方を多少かいま見ることができたのは、後年になって研究者としての道を踏むことになったことから言えば、そのためのまたとない入門の役を果たしてくれたと思う。

思い出してみると、入江敏夫氏はもともと旧制四高時代から登山に熱中し、大学でも最初のうちは、辻村太郎教授の指導下に日本アルプスの氷河地形研究を志していたのだそうであるが、1943年頃には、既に方向転換して農業問題の研究に集中されていた。当時、地理学科の授業で毎週一回全専攻学生と先生達の参加のもとに実施されていた、いわゆる「合同ゼミ」では、時々入江氏が地主小作制度下における日本農業の問題点を指摘する栗原百寿氏の著作などの文献紹介をして、われわれ後輩の啓蒙をしてくれた。上記の調査について具体的な経緯はほとんど記憶に無いが、恐らくこうした問題関心の延長線上で、入江氏に頼んで参加させてもらったものと思われる。]

地理学巡検（1944年夏 理学部地理学科前期の終期）

7/10(月) 東京発列車で東海道線金谷 — 大井川をさかのぼり千頭の清水館泊。

7/11(火) 千頭 — 他名付近観察 — 金谷近傍の展望 — バスで笠野原へ — 相良泊。宿舎で夜 地元の郷土誌家栗林・山田両先生から話を聴く。

7/12(水) 相良町付近 — 川崎町 — 神戸村 — 大井川扇状地の散村観察 — 再び神戸村を經由して相良へ帰宿 — 再び夜 栗林沢一先生の話聴く。

7/13(木) 相良の宿出発 — 藤枝町から由比町 — 漁業組合 — 山蒲原 — 富士町の鹿島館泊。

7/14(金) 富士町役場 — 富士宮の浅間神社 — その付近で実施した測量実習に参加し、測量用ポール持ち

作業に従事する — 終わってイモ掘り — 富士町の盆祭り見学

7/15(土) 富士宮町での測量実習を続行する — 終わって富士町の宿舎へ帰りビールで打上げのコンパ。

7/16(日) 富士の宿出発 — 原付近で浜堤と湿地帯観察 — 海岸で休養 — 夕方帰京。

[以上6泊7日の地理学巡検は、1943年10月の地理学科入学後最初の野外巡検で、当時教室の助手であった木内信蔵・吉崎恵次両氏の指導のもとに、一・二年生全員が参加して実施された。内容は、歩きながらの地形図の読み方、段丘や砂礫層など地形地質と土地利用の観察、簡単な地形測量実習、役場や組合での資料収集、土地の郷土誌家からの聞き取り等々、初歩的な調査手法の習得を中心とするものであった。これは、読書や室内学習だけでは体得できない現地での調査方法の初歩を経験したという意味で新鮮であったが、入江氏のお供で体験した前回の私的農村調査の場合と比べてみると、如何にも表面的な観察と一般的な聞き取りだけに留まっていて、やや物足りないという印象が残った。

例えば、大井川扇状地一帯の農村地域において、農家の屋敷群が一箇所にまとまった塊状の集落形態をなさず、一軒づつ屋敷森付きで散在するいわゆる「散村」という形態をとるといふ現象をどう理解するか、その捉え方の問題にしても、土地所有関係など村落住民の社会的背景についての考慮抜きの調査では、地域住民の生きた真実に充分には迫り得ないことになる、というのは当然のことであらう。もちろん、当時はこのような本格的な社会科学の知識や方法についての心得は、まだほとんど持っていなかったが、あまりにも問題意識の欠如した調査のあり方に対して、何となくしに不満の感じを抱かざるを得なかったのである。]

1944年秋(旧)満州国調査旅行に到る経過と準備期間

[なお、以下の記述中の旧満洲国時代の地名・組織名は、当時の呼称をそのまま使用することを、予めお断りしておきたい。]

月/日

9/07(木) 地理学教室に呼び出され、文部省の科学研究費「大東亜における聚落の地理学的研究」(辻村太郎教授)による当時の満州国への調査員派遣について、10月から中期学生(2年生)となる大貫俊・小堀巖・藤井(石井の旧姓)素介(戸谷洋君は都合により辞退)の3名が指名され、全体計画の説明を聞き、調査対象の分担につき協議した。結局、日本人開拓集落(大貫)、満州族集落(小堀)、白系ロシア人集落(藤井)という形で、調査を分担することとなり、各自調査旅行の準備に入った。

9/09(土) 地理学教室において現地での調査の具体的な日程等につき協議。出発の時期は各自の都合で別々となるが、10月23日(月)に当時の満州国の首都であった新京(現長春)で三人合流し、11月初めまでは共同行動で、現地調査に入る手続きや準備作業を行うこととし、その後、それぞれ別行動に入るようになった。

満州国内での連絡先については、京城帝国大学教授兼任で北支・蒙疆のゴビ沙漠地帯調査の専門家でもある多田文男先生から、東大地理学科の卒業生の草光繁(満鉄地質調査所勤務・戦後島根大学教授)、石原巖(満洲国政府総務庁参事官・戦後交通新聞社)などの諸氏への紹介状を頂いた上に、懇篤な注意と助言を受けた。

なお、それまで予想もしていなかった白系ロシア人集落の調査を分担することになったので、急きょ御茶ノ水のニコライ学院に通って露語の文字・単語の読み方・初歩的な会話等を習い、八杉貞利編「岩波露和辞典」、偕行社編「速成露語自習書」等を入手携行することとした。

9/30(土)と10/10(火)の両日、東京大学伝染病研究所で各種の予防注射を受ける。

10/11(水) 地理学教室にて調査旅費として金千円(十円札を百枚)の支給を受ける。

10/13(金) 東京駅にて大陸への鉄道乗車券と関釜連絡船の乗船券を購入する。

10/16(月) 10:30 東京駅発 西下

10/17(火) 5:30 広島駅着 親戚知人訪問

10/18(水) 11:00 広島駅発 下関駅着 一泊 明日から大陸へ

大陸への第一歩 (1944年秋)

月/日(曜日)

10/19(木) 4:30 下関の宿にて起床 直ちに関釜連絡船待合室へ 7:00 に乗船 8:00 出帆 対馬海峡に米潜水艦が出没するため 海軍の水上機が上空を護衛する。17:00 釜山港着 上陸 - 釜山駅より京城(現ソウル)行き夜行列車ひかり号に乗車。

10/20(金) 9:00 京城駅着 大塚旅館に宿泊 市内の徳寿宮 京城帝国大学等見学。

10/21(土) 一日市内 - 朝鮮神宮・木新道・総督府・昌慶苑・大学をまわる。

10/22(日) 9:00 京城駅発「ひかり」号乗車、大貫君と合流し共に新京(現長春)へと出発する。 - 開城 - 平壤 - 新義州 - 鴨綠江を越えて、漸く満州へ入る。

10/23(月) - 安東 - 奉天(現瀋陽)を経て、13:00 新京駅着 白水旅館にて小堀巖君と合流、夜3人で大学の先輩 草光繁氏宅を訪問、挨拶する。

新京・興安における三人共同の予備調査

10/24(火) 朝 草光氏の勤務先 満鉄地質調査所を訪問し、地図等の提供を受ける。ひき続き満洲国政府に総務庁参事官石原巖氏を訪問する(これらはすべて、多田文男先生からの手配によるスケジュールに従ったものである)。

昼 中銀クラブ・文化協会 ここで三枝朝四郎・神尾某・山根某・大間知篤三氏らに紹介される。

10/25(水) 午前 新京市内で藤山某氏らと話す。20:30 新京駅発 京白線夜行列車に乗車、地元の中国人で満員の三等車を体験する。

10/26(木) 10:00 興安駅着(白城子經由 現ウランホト) 興安総省の浅野氏・芳賀淵氏・アサタト氏らの出迎えを受け、直ちに興安総省公署に向かう — 興安学院 — 吹雪の中を成吉思汗廟見学 興亜塾宿泊。

10/27(金) 総省公署にて資料収集。

10/28(土) 省長(モンゴル人)自宅の包(パオ)見学 — 馬車(マーチョ)で実験学校へ—ウランハタのトプシンワチル氏(小堀君の親友で、当時旧制第一高等学校特設高等科に在学中)の自宅訪問、磚茶(タンチャ)の歓待を受け宿泊。

10/29(日) 定住蒙古人集落ウランハタの家屋見学 — 蒙古馬に分乗して興安まで、約3里の帰途、乗った馬が立留ってしまい難渋する。夜 浅野参事官宅を訪問、今後の調査について助言を受ける。

10/30(月) 午前中、興安総省公署に出頭、身分証明書・写真(指紋管理室)を入手、午後 旗公署 — 馬車で西興安の日本人東京開拓団を訪問。

10/31(火) 東京開拓団事務室で資料貰う。徒歩で興安に帰り、省公署と村岡氏宅を訪問、夜は宿で浅野氏と談話。

11/1(水) 興安での最終日、市街地を散策 — 王爺廟見学・ここで大阪帝大東洋史教授の鷲淵一氏に出会い助言と教示を受ける。ここで小堀君と別れ、16:30 興安駅発 白城子經由の夜行列車で、大貫君と二人新京へ向かう。

11/2(木) 8:40 新京駅着 - 石原氏宅 — 白水旅館 — 國務院食堂 — 磯部氏宅 — ここで地理学科上級生の園池大樹氏に出会い、共に満鉄へ行く — 磯部氏宅で歓談の後、旅館に帰る。いよいよ明日から、ハイラルへ向けて出発することになる。

新京から海拉爾(ハイラル)へ(1944年晩秋)

11/3(金) 三枝氏 — 石原氏 — 食堂 — 藤山氏宅 — 宿 — 電々 — 富士屋 — 草光氏宅 — 深夜の 23:55 新

京駅発の夜行列車で、今後の三河地区の調査に関する一切の世話役を引き受けてくれることになった橋本重雄氏(興安北省公署総務科長)と共に、海拉爾(ハイラル)へ向かって出発する。この日以降 汽車は二等車に乗車する。

11/4(土) 朝 6:00 哈爾濱(ハルビン)駅着 ここで 9:10 発 満州里行列車に乗換え、さらに—安達— 昂々溪 — 札蘭頓 — 巴林 — 傳光図 — 興安經由 また夜行となる。途中、チチハルまでの車窓から乾燥した荒野に白色の塩分が吹出したアルカリ土壌を見る。

11/5(日) 朝 6:00 海拉爾(ハイラル)駅着 下車 直ちに橋本氏官舎へ同行 省公署—畜産試験場にて防寒具(外套の上にはおる羊毛皮のシュエバ・厚手フェルト製の長靴「カートンキ」等)を借用— 忠霊塔・神社・公園を周り 藤田参事官宅訪問— 官吏会館を経て 橋本氏宅に戻り宿泊する(窓外温度計を見ると摂氏零下10度前後)

11/6(月) 省公署— 特務機関— 市街— 朝日洋行— 駅— 特務機関— 省公署— 帰宅

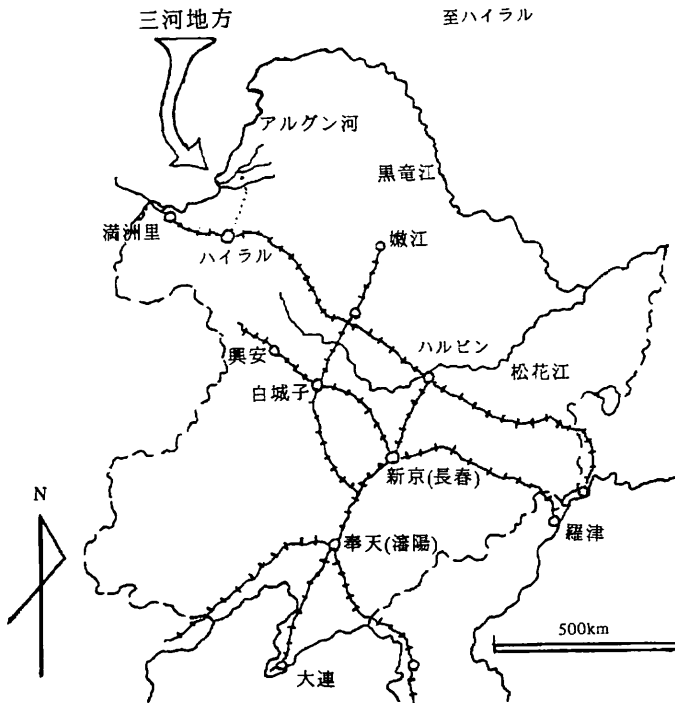
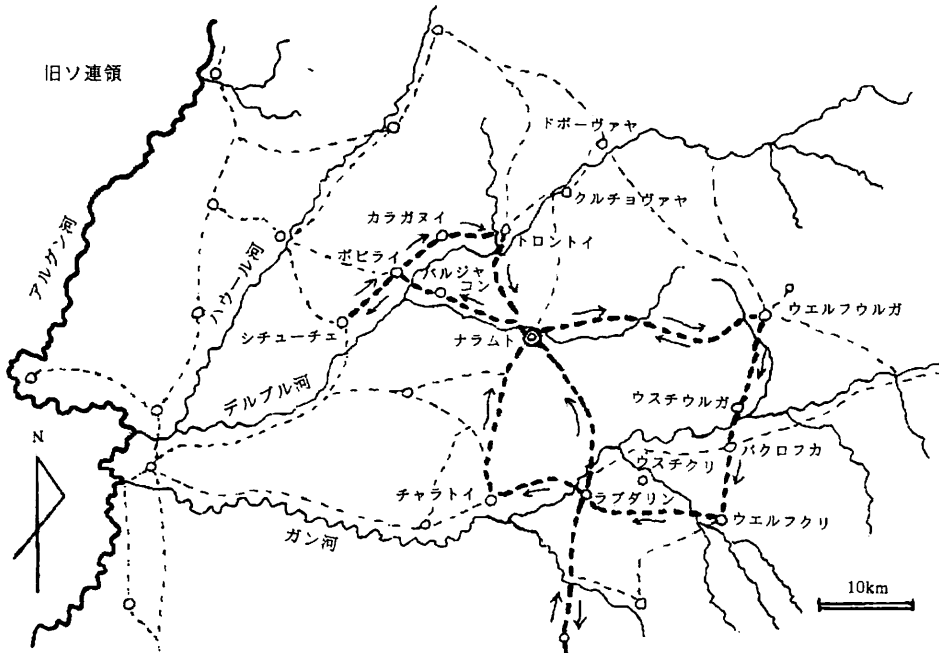
[ハイラルからさらに北方奥地の、(旧)ソヴィエト連邦との国境地帯に近い三河地方の調査に入る特別許可と手続きのため、在ハイラルの陸軍特務機関に機関長の某少佐を訪ねて話をする。学術調査に関しては概ね好意的で、カメラ持参は不許可だが、スケッチならよいとのこと]

11/7(火) ハイラル近傍への見学を予定していたが、バスが運休のため出発できず、橋本氏宅で資料読み、午後省公署に行き西島・杉本氏らに会う。帰宅後蒙古系の青年ハフリング君来訪、明日の農村見学への同行を約束する。

11/8(水) [ハイラル近傍の白系露人集落ジャラムトの日帰り見学]

早朝ハイラル駅 7:00 発上り列車でハフリング君と

三河地方の村落配置と巡回旅行の経路



旧満洲国当時の概要図と三河地方の位置

共に出発、間もなく札羅木特（ジャラムト）駅着、念のため警察隊に挨拶の後 屯長訪問- カゼイン工場見学- 露人の小農宅で、牛乳から手回し加工器でチーズを造る作業を見る- 昼食後、「ビューロー」（白系露人事務所）訪問、露人学校・中農経営を案内して貰う。最後に屯長に挨拶して帰路につく。[この日は、ハイラルから東方の山麓に位置する白系露人集落の見学であり、ロシア人独特の非東洋的な生活様式に初めて触れて見て強い印象をうけた。三河地方の調査に入る前の予察として良い経験であった。]

11/9(木) 三河地方に入る交通便について打合せも、好便なく待機に入る。

11/10(金) 待機。

11/11(土) 明日、特務機関より三河に向かうトラック便に同乗することになる。

いよいよハイラルから三河地方へ

11/12(日) 早朝、夜明け前に特務機関に行き、トラック荷台の幌の中に乗り込む。7:30 北の方向に向け出発、やがて夜が明けてくる - 頭站(トウジャン) - コンクルを経て、一路、ホロンバイル高原北部の荒野の中の一歩道を、トラックは突っ走る - 午後、根(ガン)河を渡る - 夕方日暮れ少し前によく三河地方(旗)の中心町であるナラムト(露名ドラガチェンカ)が見えてくる。まず町外れにある特務機関の構内に到着 - (16:00) - まず荷物をもって三河地域を管轄するアルグン(額爾克納)左翼旗の旗公署へ - ここで 現地の蒙古系旗長の補佐役として事務官を務める佐藤清郎氏に会い、旗公署裏手の独身寮内にある同氏宅に同居させて貰うことになる。狭い畳敷きの部屋で煉瓦壁がペチカ式の暖房になっているが、壁側の背中だけ暖かく、前はゾクゾク冷え、毛布をかぶって寝るしかなし。[かねて紹介されていた佐藤清郎氏は、たしか新潟県出身とか聞いたが、有名な国立ハルビン学院の出身でロシア語には堪能らしく、白系露人相手の行政を一切取り仕切っているようであった。結局、三河地方に滞在していた全期間にわたって、宿泊や調査資料の収集等すべてのことについて、終始この佐藤氏のお世話に

なり、また同氏と行動をともにすることになった。]

11/13(月) 早朝、特務機関を訪ね挨拶、昨日の輸送機関便乗につき謝意を述べる。総屯公署(旗の役場)の事務官室で佐藤氏らの執務ぶりを見る。午後、ナラムトの町中にある日本人商店を訪ねる。三河地方はすでに厳寒の季節に入っているが、冬季の必需品である燃料の薪材を確保するため、各村落に割当てである薪材の伐採搬出を督励に当るといふ緊急要務があり、佐藤氏は明日から各村落の「アタマン」(いわゆるザバイカル・カザックに属する白系露人村落民の頭目の名称で、つまり屯長ないし村長にあたる人物)を順々に訪ねて巡回する予定だといふので、早速これ幸いと随行させてもらうことにする。

11/14(火) 出かける予定のところ、馬車が来ないので出発中止となる。総屯公署の内部を見学する。裏山に登って市街地を展望する。(見取り図やスケッチなどを作成したような気がするが、残念ながら残っていない) 役場の裏手に簡易なトイレがあるのだが、吹きさらしの小便所には放尿が氷結して黄色の氷柱ができています。昼間でも気温は零下20度近くまで下がっているらしい。

11/15(水) [ナラムトより第一回村落巡回の旅へ]

早朝佐藤氏とともに「テレーガ」という四輪荷馬車でナラムトを出発、東の方に向かって谷をさかのぼって行く。馬車といっても、一頭の馬のうしろに細い丸太の木枠で組み立てた荷車をつけた簡単なもので、馭者が長い鞭で馬を走らせ、われわれ二人は干草を敷きつめた吹きさらしの荷台に、防寒具のシューバをかぶり後ろ向きにすわって旅行するわけである。時々粉雪はちらつくが根雪になるほどではないので、馬車が主要な交通機関となっているが、根雪になると馬車が馬そりに交代するのだという。

冬枯れの丘陵地帯を上ったり下ったりの道が続き、谷間の低湿地にさしかかると、湿地坊主と呼ばれる枯草の塊りのようなものが群立していて、走行に難儀する。このあたり、樹木の林は所々にしか見られず、南向きの緩やかな斜面の一部が方形の畑として開墾利用されているだけで、大部分は野草の採草地となっているようである。

街道をさらに東の方に走って、やがてウエルフルガという村に到着、直ちに村長（アタマン）のパートリン氏宅に入る。この集落の名称は、ウルガ河（Reka ūrga）の上流という意味に由来するという。丘陵の斜面に立地する集落は、数十戸の農家が不規則に集まった形で、整然とした開拓集落風の形態をとってはいない。その代わり個々の農家の造りは、太い丸太を組んだ「イズバ」と呼ばれる校倉式の立派なログハウスで、おそらく東シベリアのザバイカル地方在住時代以来の伝統によるものであろうか、地場の建築材料を巧みに利用した防寒本位の造りになっている。旅宿などのない辺境地帯での習慣にしたがって、われわれ二人はそのまま村長宅に宿泊することになる。

11/16(木) 朝、佐藤氏についてウエルフルガの屯公署（村役場）に出向く。冬期間の供出用に使う薪燃料の伐採状況を視察するため、屯長らとともに北方の峠を越えてワールチ谷の森林伐採現場を訪ねる。山小屋に立ち寄ったのち、ウエルフルガの村に戻る。村の医師宅を訪問し懇談。夕方、村長パートリン宅に帰り、夕食の款待を受け宿泊。この住居は村の有力者である村長の家だが、村落内に並ぶ他の農家の住宅と外見上差は無く、いずれもログハウス風の丸太組の造りである。聞けばやはり、ザバイカル時代以来の寒冷地農民の生活様式を、そのまま踏襲しているのだと言う。入り口の扉も二重、窓もガラスの二重窓で、室内は外の寒気がうそのように暖かく、外套を脱げば半そで同様の軽装で、快適そのものの暮らしをしているのには驚いた。

11/17(金) 朝、ウエルフルガ村出発。ウルガ河沿いの道をウスチウルガ（ウルガ川の下手の意）村に向かう。ウルガ河の本流ガン河（根河）への合流点に近いウスチウルガに立ち寄ったのち、ここから幅の広い乱流氾濫原をもつガン河を越えて南方に向かい、パクロフカ村を経て別の支流クリ河沿岸の集落ウエルクリ村に到る。

11/18(土) ここでは村に住む日本人京郷氏宅の世話になったが、朝別れを告げて直ちにウエルクリ村の屯公署を訪ねる。ここからは道を西方に取り、ハイラル街道の要衝ラブダリン村に向かう。ここでは屯公署とア

タマン宅に立ち寄り所用をすませる。ここまでは丘陵の谷間を縫う道であったが、ラブダリンの村を出外れるとホロンバイルにつづく一望の大草原に出る。はるか彼方に蒙古（モンゴル）人の包（パオ）が見えた。また、狼らしきものの姿を遠望した。ガン河の対岸に渡ってから川沿いに西方に向かい、今回の巡回旅行の最後の集落であるチャラトイ村に到る。ここには珍しく日本人警察官の駐在所があり、日本式住居に住む警官夫妻を訪ね日本食のご馳走になる。ただ、ふすま・障子紙に畳という日本式家屋は、この酷寒の土地にはいかにも不似合いで、いささか違和感を覚えざるを得なかった。宿泊は予定通り村長モロゾフ氏宅のお世話になる。この家では寝台の余裕がないため、居間の床板の上にじかに寝ることになった。そこで服を着て靴をはいたまま上にシューバを被って寝る始末となったが、室内は暖房が良く効いていて案外快適に眠れた。

11/19(日) 朝、チャラトイ村を出発、馬車は峠道を辿って、無事ナラムトに帰着。

11/20(月) [ナラムト滞在]

一日ナラムトで滞在。コサック村民の集会所「スターツァ」を訪問。午後町の国民学校参観、日系教員の長堀・堀内両氏と懇談。

11/21(火) [ウエルフルガ村の聖ミハイル祭り見学の旅]

今日は、先日訪れたウエルフルガ村で「聖ミハイル祭り」の行事が舉行されるのだそうで、役場の人々とともにトラックの荷台に乗って出かけることになる。屯公署で式典に参列したあと、警察の広間で行われた村民芝居をみる。さらに、アタマンのパートリン氏宅での宴会とダンスパーティに参加。戦時下の日本内地での食料事情からは到底考えられないようなロシア料理のご馳走が、卓上一杯にに並んでいる。乾杯のたびにウォッカを重ねた酔いをさますために戸外に出てみると、零下30度を越える寒さである。（考えてみれば、酪農経営を中心に各種の畜産と小麦・ライ麦等の畑作農業を組合わせたいわゆる混合農業を営み、現金収入は少なくとも、しっかりとした食糧自給の基盤を持つロシア農民にとって、たまの祭礼にこの程度のご馳走を供するのは、それほど無理なことではないのかも知れない。その点、自分達の食生活との適合が困難な日

本人開拓農業の食料基盤の弱点が痛感される。)

11/22(水) 宿泊したパートリン氏宅を出て、丘の上にある礼拝堂と墓地を見学する。再び、一行とともにトラックに乗ってナラムトへの帰途につく。途中の雪の原野で遠くに野生動物「ノロ」を発見、同乗の若者が一発二発銃撃したが、見失う。

11/23(木) 一日ナラムトに滞在。総屯公署所蔵の農業関係統計資料を見せてもらい、要点を筆写する。

11/24(金) 今日一日ナラムトに滞在。前日に引き続き統計資料の筆写作業を続行。これまで寄宿していた佐藤氏の寮滞在が何かの都合で最後の夜となり、同氏の急ぎの翻訳作業を手伝う。

11/25(土) 今日ナラムト滞在。今日は佐藤氏が役場で宿直することになり、共に旗公署の旗長室に宿泊する。

11/26(日) ナラムトの「協和会」の比嘉氏宅を訪問、夕食を共にする。同夜は協和会事務所に宿泊する。

11/27(月) 佐藤氏がナラムトの参事官用官舎に移転することになり、引越し作業を手伝う。旗公署で明日からの出張手続きをする。ロシア人のお婆さん(通称「バブシカ」)の店で夕食をとる。煉瓦づくりのパン焼き釜から取り出した、50-60cm もあろうかという円板状の大型パンを、サッと包丁で切って出してくれる。スープは、大型の鋳物製の壺の中に骨付き豚肉と馬鈴薯を入れて作った豪快なシチューで、塩胡椒味だけで同じ釜の奥に長時間置いて煮たものらしい。その上に、磨き上げられたサモワールから注がれる熱々の紅茶が加わる。素朴な味ながら栄養豊富な内容で、こういうのがシベリア農民のあの頑丈な体格を支えている食生活なのかと感心する。

11/28(火) 【第二回目の村落巡回の旅へ】

また用意された馬車に乗って、二度目の村落巡回旅行に出発する。今度はナラムトから緩やかな谷に沿って西の方に向かう。この旅には、佐藤氏の助手役として、白系露人の若者バクシェイエフ君が同行することにな

る。彼は片言の日本語も話す背の高い愉快な好青年で、走る馬車の響きに乗せて、素晴らしい声でロシア民謡を教えてくれた。しばらく行くとバルジャコンという小村落を通りすぎる。まもなくデルブル河畔に出たところにあるポピライ村に到着する。このデルブル河は、ソ満国境を流れるアムール河の最上流部をなすアルゲン河の支流のひとつで、ガン河のひとつ北側を流れている広い谷を持った河川である。この日はこのポピライ村で一泊することになったのだが、たまたま村内で婚礼の祝宴をやっているので招待したいという話で、そのままある家の宴席に出ることになった。聞けばすでに婚礼の三日目ののだそうで、いまだにそんな習慣が生きているのかと驚く。いや応なしに村人達の間にはさまれて席につき、ヴォトカの杯を挙げつつ、ロシア民謡の合唱の輪が夜半までつづいた。

11/29(水) 午前中に役場の用を片付け、昼食の後ポピライ村を出発する。この日は昨日とは打って違って雪となった。降りしきる粉雪の中を馬そりに乗り換え、デルブル河に沿って下流へ向かって走る。しばらく行くと次の村シチューチェに到着する。ここは戸数四十戸余りの農家が集まった中村落で、街道沿いに大小の家屋が不規則に並ぶ。村の内外を歩いてからアタマン宅を訪問する。ここはソ連国境に近いので駐在所が置かれており、ここにも顔を出す。宿所はまたアタマン宅となる。

11/30(木) 朝シチューチェ村を出発。馬そりは、デルブル河に沿って今度は上流に向かう。一昨日泊ったポピライ村を横に見ながら通過、さらに上流に向かい、やがてカラガイ村に到着。ここは十数戸の小村落で、廃屋が目立ちさびれた感じである。やはり宿所はアタマン宅で、夕食はバブシカ(老婆)と呼ばれる人の家に出かける。

12/ 1(金) 朝カラガイ村を馬そりで出発、デルブル河沿いにさらに上流に向かい、トロントイ村に立ち寄る。アタマンの案内で村落の内外を見て回る。この村を今回の巡回旅行の最後として、山越えの道を一路ナラムトへ向かって帰路につく。

12/ 2(土) 【ナラムト滞在のしめくくり】

四日間の旅行のまとめ作業で、一日ナラムトに滞在する。午前中、白系ロシア人事務所（通称ビューロー）に行き、三河地域の地図を写し取る手作業を行う（この地図は、その後内地へ郵送の途上で小包ごと行方不明となり、残念ながら結局利用することが出来なかった）。午後、屯公署の鈴木氏と話をする。

12/ 3(日) 午前中、ナラムト測候所を訪問し、同所の山本氏と歓談する。午後は先日一緒に旅行したバクシェエフ君の誕生日の祝宴に招待され、同君の自宅を訪問する。夕方、ナラムトの興農合作社支所の落成式宴会にも顔を出す。

12/ 4(月) この日、ナラムトの総屯公署の会議室において、三河地方の白系露人たち各村落のアタマン（村長）の集まる総会が開催され、その昼食会に呼ばれて列席する。三河地方のアタマン連中を束ねる総アタマンの某氏は、さすがに恰幅の良い堂々たる偉丈夫である。午後は、ナラムト在住の学校教員や特務機関勤務の日本人と歓談する。また、其処で出あった人の案内で、三河製粉工場を見学させてもらう。

12/ 5(火) 今日で、いよいよ三河地方滞在中も最終日を迎えることとなり、これまでに収集した資料の整理と荷造りにかかる。滞在中お世話になった諸方面にお別れの挨拶を済ませる。旗公署の佐藤氏・山本氏らと秋林飯店で最後の夕食を共にする。

12/ 6(水) [三河に別れを告げ、ハイラルへ]

早朝、ナラムト発ハイラル行きのバスに乗り込む。バスは、ウェルフクリー・コンクル・トウジャン等を経由して、夕刻ハイラルに帰着する。

直ちに橋本重雄氏宅に向かう。迎えてくれた橋本夫人に、三河地方でのことなどを得意になって話していたところ、「あなた、ちょっと、そのシャツを脱いでごらん！」と言われて、脱いでみたところ、シャツの縫い目に何やら小さな虫がうごめいている。実はそれが、その時までついぞ考えてみたこともなかったシラミだった。いつの間にそんなものに取り付かれてしまったのか、自分では全く気がつかなかったのだが、無意識のまま手で襟元や胸など痒いところに始終動いているのを、夫人は見逃さなかったのである。そこで直ぐ

入浴させられている間に、下着類一切の熱湯消毒によってシラミ退治をして頂き、ようやく事無きを得ることになった。（この橋本春江夫人とは、最近になってようやく連絡がついて、半世紀ぶりに電話で安否を確かめ合うことが出来た。「戦争の末期に東京の学生さんが来たことは記憶にあるが、顔も名前も思い出さないけれど、ただ、あのシラミの一件だけは忘れないで良く覚えています」と、当時を懐かしんで話していただいた。五十数年ぶりに、遅まきながら、改めて感謝の意を表したい。）

12/ 7(木) [ハイラル滞在]

ハイラルの興安北省公署へおもむき、三河地方の調査が無事終了したことを報告かたがた関係諸氏に挨拶する。市街に出て絵葉書などを購入、郵便局で電報を打つ（何処へ打ったのか記録なし）。特務機関、興亜塾などにも、挨拶に立ち寄る。夕方、橋本氏宅の隣にある藤田参事官宅の晩餐に招待される。

12/ 8(金) [満洲里（マンチュリー）往復の旅]

この日は、早朝、ハイラル駅発の下り列車で、終点のソ満国境に位置するマンチュリー（満洲里）まで、日帰りの往復旅行に出かける。（ハイラルから鉄道で西方へ約 200km、満鉄の終着駅であり、かつ当時のシベリア鉄道の出発点でもあったこの国境の町への旅は、もはや再訪の機会などまたとは得られないであろうと、多少無理をして出かけたわけで、途中の印象などの記憶はまざまざと残っているのだが、記録としてはごく簡単なメモしかない。）

終点の満洲里駅から人影の少ない市街地を歩く。この地域管轄の新巴爾虎右翼旗の旗公署と外交部の出張所に立ち寄った後、小高い丘に登ってソビエト方面を遠望してみたが、降りしきる粉雪に煙って何も見えない。駅に戻ってしばらくすると、西の方からシベリア鉄道経由のソ連側の列車がゆっくりとした速度で駅に入ってくる。ここで乗客は満鉄側の列車に乗り換えるわけである。そこで早速一緒に乗車したところ、フィンランド方面からソ連経由で帰国途中の、数人の日本人客に出会う。

その中の一番若い一人に声をかけてみると、ヘルシンキ駐在の昌谷公使の子息とかで、同じくヘルシンキから同行してきた哲学者の桑木務氏とともに、三人で

食堂車に移ってビール杯を傾けながら、ハイラル帰着までの数時間さまざまな話題に花を咲かせることになった。桑木氏は、著名な哲学者である桑木徹翼博士の子息で、西南ドイツ・フライブルク大学のハイデガー教授のもとでの留学生生活を切り上げ、中立国フィンランドを経由して帰国する途上なのだ、という話であった。(ちなみに、桑木務氏は、戦後永く中央大学教授を務められ、ハイデガー著「存在と時間」(岩波文庫)の訳者でもある。)車中での談話は、もちろんヨーロッパの戦局と東京の最新事情に関する情報交換を中心とするものであったような気がするが、談話の詳細については、残念ながらほとんど記憶に残っていない。ただ、北欧などに比べて戦時下のドイツの青年層には活気がみなぎっていた、という話が何故か印象に残っている。ハイラルの駅で同氏らに別れを告げ、橋本氏宅に帰る。

12/ 9(土) ハイラルでの最後の日になるので、借用していた防寒具の返却や最終的な挨拶に関係機関をまわる。街の本屋や官吏会館等にも立ち寄る。橋本氏と夕食を共にしながら歓談する。

12/10(日) [ハイラルからハルビンへ]

午前中の汽車に乗るつもりで、駅まで自動車ですべてくれたのだが乗り遅れ、省公署に戻って西島氏と談話する。結局、夜に入って、20:00 時ハイラル駅発の夜行列車に乗り込むことになる。

12/11(月) 夜中に昂々溪・安達を経由、昼間は北満の大平原を延々と走り続けた上、夕刻、17:00 時、ハルビン駅着。

大勢の宿引きをかき分けて、満平ホテルに投宿する。夜、市街地を散歩してみる。街角で屋台のリンゴを買ってみたが、カチカチに凍結していて歯が立たない。しばらく外套のポケットに入れて歩いているうちに少し柔らかくなっていく。まさにアイスリンゴの味であった。

12/12(火) ハルビンには4-5日滞在して、ロシア様式の都市造りの見学と満鉄関係の農村調査の専門家を訪ねることにする。ホテルを出て、まず、紹介を受けていた興亜塾を訪ねたが、本人不在のため出直すことになる。市街地を足にまかせて歩く。ブラゴヴェシチ

ェンスク街からスングリー(松花江)の沿岸にて出て、満系人中心のキタイスカヤ街を通り抜け、中央寺院などロシア時代以来の風格ある建築物を見る。満鉄所属の著名な調査機関である北満経済調査所を訪問したが、責任者不在とのことで、収穫なし。もう一度興亜塾を訪ねて、某氏(残念ながら氏名の記録なく、不明)に面会し、種々懇談する。

12/13(水) この日は、やはり紹介を受けていた臼杵助教をハルビン学院に訪問し、在満の白系ロシア人のことについて、一般的な事情の教示を受ける。ハルビン学院は、当時は日本でも唯一の、ロシア語・ロシア事情の専門家養成する国立の専門学校であり、ことロシア関連の研究に関する限り、高い評価を持つ教育研究機関であった。談話のあと、ロシア関係蔵書の充実した図書館を案内してもらう。丁度開かれていた在留ロシア人向けの特別日語講習会などの様子を見学した後、宿に帰る。

12/14(木) この日も、一日ハルビン市内の見学に費やす。ソフィスカヤ街—ユダヤ教会堂—時計台—大連街—秋林(チウリン)—ウクライナ教会堂—奉天街—南崗とひとまわり見て歩く。途中で本屋に立ち寄り、ろくに読めもしないのに多少習い覚えたロシア文字の本が珍しく、小型の小説本数冊を購入する。夕刻、昨日の臼杵氏とまた落合い、コーカサス料理店で夕食をとともにし、食後ともにモデルンの前を通り、スングリーのあたりを散策する。

12/15(金) 10時、知人の大原氏と会い、昼食を共にした後、キタイスカヤ街を通ってスングリーの太陽島方面まで足を延ばす。夕刻、商社勤務の知人が宿まで迎えに来てくれて、ロシア料理をご馳走になり、その後さらにモデルン劇場で上演中のトルストイのオペレッタの観劇に招待してくれる。

このところ、内地では米軍の手に落ちたサイパン島辺りからの爆撃機による空襲が始まっているらしく、聴くところによると、中には東京あたりからこの敵機のやって来ない北満の都市へ、わざわざ疎開して来る人もいるという噂があるそうだ。確かにハルビンには、ロシア料理でも、アルメニア料理でも、食料は何でもあり、街頭には白系の娘や中国の胡娘が闊歩していて、

表面的には戦争など何処吹く風と言った風情に見える。防空演習や雑炊食堂通いに明け暮れた戦時下の東京での暮らしから見ると、まことに不思議な体験である。

12/16(土) 11時、ハルビン駅発の汽車で、阿城の陸軍部隊に知人のS候補生を訪ね、面会する。(どういう関係の人であったか、もはや記憶にない。)再び汽車に乗って、ハルビンに帰着、明日は新京に発つので、ホテルに戻って荷物をまとめる。

12/17(日) [ハルビンから新京へ]

朝、9:30 ハルビン駅発の「ひかり」号に乗車、新京に向かう。ハルビンで知りあいになった中島氏と同行する。午後三時新京到着、池田氏とともに満鉄会館に向かい、そこに宿を取る。草光氏宅を訪ね、三河地方での現地調査から無事帰ってきたことを報告する。帰国経路につき相談し、米軍潜水艦による雷撃の危険の高い関釜航路をやめて、日本海航路にした方が良いと忠告を受ける。

12/18(月) [帰国準備にかかる]

午前、日本海汽船に行き、乗船の予約を申し込む。商社の知人に荷物の発送を依頼するなど、帰国準備に忙殺される。

12/19(火) 満洲国政府総務庁に石原廉氏を訪問、あわせて興安局にも挨拶に行き、調査についての謝意を述べる。満鉄地質調査所に草光繁氏を訪問、夕刻草光氏宅にて夕食の招待を受け、歓談する。

12/20(水) 大貫俊君に電話連絡がつき、同君義兄の関大佐宅を訪問する。

12/21(木) [別の帰国ルート、新京から北鮮の羅津港へ]

新京における最終日となり、博物館等を見学、藤山氏・関氏宅を訪ねる。20:00時、新京駅発の夜行列車で、吉林・間島・図們・雄基等経由、羅津に向かう。

12/22(金) 17:30 羅津着。開拓館に寄って宿を紹介してもらい、早島旅館に投宿する。新京で紹介された新村氏に会う。

12/23(土) 満鉄の高畑氏に会う。日本海汽船の事務所に出向き、乗船予約の手続きを済ませる。しかし、肝心の船が何時出ることについては、米軍潜水艦による雷撃の危険を避けるため、今のところ全く不明で、連絡が行くまで宿に待機していてくれという。結局、ここで10日間ほど足止めを喰らうこととなる。

12/31(日) 駅の食堂で昼食をとり、汽船会社に寄ってみると、ようやく出帆の見込みが果たらしく、「明日午後乗船」ということになった。

1945年1/1(月) [羅津から敦賀へ、日本海横断ルートの帰国]

元日のことで朝食に雑煮が出る。街で餅を買う。昼食後、荷物を持ちバスで港に向かい、乗船。午後2時出帆。羅津で旅館に長期滞在となり、支払いを済ませると、出発時の持参金千円のうち、残金拾円余となる。船では船底の大広間のようなところに多勢一緒の雑居状態で、外海の様子は皆目不明。

1/2(火) 日本海横断にはまる二昼夜を要するそうで、終日航行を続ける。憲兵が回ってきて税関代わりの持ち物検査をする。本を読んで時間を過ごす。

1/3(水) 日本海をほとんど直線的に横断したらしく、昼過ぎ丹後半島付近の雪山が見えてくる。雪山とはいえ、豊かな木々にびっしりと覆われた内地の風景に、改めて感銘を受ける。午後2時敦賀港上陸、真すぐ敦賀駅に向かい、午後4時発列車に乗る。米原で乗換え、午後7時の上り列車に乗込み東京に向かう。名古屋付近で火災を見る。

1/4(木) 夜中に天竜川鉄橋を渡る時目覚めただけで、朝まで熟睡。朝7時過ぎ品川駅で下車。大井鈴ヶ森町の自宅は幸いまだ空襲の被害を受けておらず、無事に帰還。

1/8(月) 数日間休養し、諸方面に電話で連絡をとる。東京は連夜のように空襲警報が鳴るが、大した事無し。この日、久しぶりに電車で本郷の地理学教室へ行って、現地調査を無事終了したむね挨拶と報告を済ませる。

以上

[注記]

「三河地方」について

三河（さんが）地方というのは、旧満洲国の北西の辺境、大興安嶺の彼方にひろがるホロンバイル高原の北のはずれに位置し、興安嶺の北辺を迂回して流れる国境河川アルグン河（黒竜江の上流）の支流をなす、ガン(根)河・デルブル河・ハウール河の三河川流域の豊かな農村地域であった。ここは、1917年のロシア革命の前後から、ソビエト政権の支配を逃れて、シベリア東部ザバイカル地方から国境を越えて移動してきたコサック農民の集団が次第に定住するようになり、いわゆる白系露人の入植村落群を形成したところである。

「三河」という名称は、ロシア人達がこの三つの河にまたがる地域を「トリョフレーチェ(三つの河)」と呼んでいたのに由来するのだという。

旧満洲国には、ハルビンを中心に多数の白系露人が住んでいたが、白系露人農村としては、ハルビン近郊のロマノフカ村と三河地方が有名で、特に三河地方は、コサック伝統のアタマン制度による自治組織を良く維持し、酷寒の厳しい環境にもかかわらず、畜産と穀物作を組み合わせた農業経営とロシア正教中心の伝統的生活様式を残す豊かな農村として知られていた。(コサックの伝統については、杉目昇(1999)、ジョージ・ケナン(邦訳 1996)などに詳しい記述がある。)

三河地方の主要 15 カ村落の 1935(康德 2)年における戸数・人口の構成は別表の通りであるが、1945年初頭のころには、三河地方の白系露人は 20 カ村で約 1 万 3000 人に達していたようである。元三河地方住民で現在チェリアピンスク在住のソフローノフ氏のレポートによれば、1945 年 8 月ソ連軍侵攻後のことについて、「元セミョノフ軍に属していたコサックは一人残らず逮捕され、強制収容所に送り込まれた。(中略) 三河からのロシア人の移動は原則として自由意志によるもの

とされたが、ソ連領事と中国官権による強制が強く働いた。最後の三河人は 1960 年代までで、・・・いま一世紀に及ぶ三河の歴史の遺物としては、ツングースや中国人が住んでいるコサックの古い家、ロシア教会の焼け跡、大地とやっとなを並べる十字架の無いロシア人墓地だけである」と、その終末が物語られている(杉目氏の引用による)。

他方、同じく 1945 年 8 月 9 日、ソ連軍侵攻をともに受けた三河地区在住の日本人達は、ナラムト周辺の岡田参事官をリーダーとする一行、及び前線から撤退してきた一団がウエルフウルガで合流し、ここでウエルフウルガ屯長から馬車やバター等の提供を受けたうえで、大興安嶺を越えて嫩江(のんこう)まで延々 40 数日間にわたる決死の逃避行により、ようやく生き延びることが出来たという(杉目氏、および細川呉港(2000)による)。

なお、日本人一行のナラムト撤退に際して、それまで協力して見送ってくれた白系露人のリーダーの総アタマンを、疑心暗鬼の日本軍の憲兵隊長が突然射殺するという惨劇が演じられたことを、現場にいた佐藤清郎氏が(50 余年の後)憤激の涙とともに語るのを、去る 4 月 1 日の半世紀ぶりの再会の際に直接聴いた。これは、言わば、当時の三河地方が置かれていた「地政学的事情」を象徴する出来事であったのではないかと判断し、敢えてここに記述しておくことにした。

(2000 年 6 月 24 日記)

[参考文献]

- 杉目昇(1999):「ホロンバイルあの頃・コサックと共に」(私家版) 243 頁
 細川呉港(2000):「ノモンハンの地平・ホロンバイル草原の真実」(光人社) 299 頁
 ジョージ・ケナン著、左近毅訳(1996):「シベリアと流刑制度 I」(法政大学出版局) 424 頁

別表 三河地方村落の戸数・人口構成 (1935年7月)

番号	村落名	戸数		白系露人人口			満人人口	合計
		露人	満人	男	女	計	計	
1	ナラムト (ドラガ Drogochenka チェンカ)	159	34	327	283	610	141	751
2	ウェルフウルガ Wex-Urga	165	5	420	368	788	5	793
3	ウスチウルガ Usti-Urga	65	1	141	126	267	6	273
4	ポクロフカ Pokrovka	70	2	141	108	249	2	251
5	ウェルフクリー Wex-Kuli	150	3	444	398	842	4	846
6	ウスチクリー Usti-Kuli	81	4	162	114	276	17	293
7	ラブダリン Labdarin	52	3	131	113	244	7	251
8	チャラトイ Chalorui	58	2	117	116	233	6	239
9	バルジャコン Barjakon	24	-	62	55	117	-	117
10	シチューチェ Shichuchie	54	4	125	122	247	26	273
11	ポピライ Popirai	53	16	148	150	298	40	338
12	カラガヌイ Karaganui	30	5	77	61	138	15	153
13	トロントイ Tuluntui	89	16	230	197	427	45	472
14	クルチョヴァヤ Klyuchovaya	107	7	303	266	569	37	606
15	ドゥボーヴァヤ Dubovaya	168	22	407	311	718	70	788
合計		1325	124	3235	2788	6023	421	6444

注記：この15村落の他、近傍に白系露人が59戸、294人住んでいた。1944年秋、現地機関で著者筆写。